

着任のご挨拶

林産試験場長 川西 博史

6月人事異動で林産試験場長に着任しました川西です。

まずは、これまでの経歴など簡単に自己紹介させていただきます。

私は育ちは札幌ですが、生まれは旭川で、幼少の頃は高砂台に家があり、並木のある砂利道で三輪車をこいでいた原風景のような記憶があります。

1990年に北海道職員となり、当時の北見林務署（現在のオホーツク東部森林室）に配属され、4年間、春夏秋冬、月～金まで道有林で山歩き（収穫調査・林分踏査）をしておりました。最初の2年くらいは、先輩方に揉まれながらの仕事や山歩きの体力面で結構キツかったように思いますが、慣れてくると面白くなり、以来ずっと林務分野で仕事をさせてもらっています。



その後は、道有林課、森林計画課、支庁林務課の造林担当など、川上関連の業務が多かったのですが、企画調整課では林務全体の施策調整、林業木材課では木質バイオマスや道産材の利用推進を担当し、林業試験場、林産試験場の研究員の方には、ご教示頂いたり、お願いをしたりと当時色々お世話になった方が何名かいらっしゃいます。その節は大変ありがとうございました。

今回、林産試験場長という立場になり、今度はもっと大勢の研究員や職員の方々に色々教えていただきながらマネジメントしていきたいと思っておりますので、何かとお世話になりますが、よろしくお願ひします。

元来、登山などアウトドア好きではありましたが、北見林務署で経験した山歩きでは、係長や先輩職員の後をついて登山道もない斜面や笹藪を歩き、収穫木を選定・調査する仕事で、どうしてこんなところを迷わずに歩いて、葉っぱもついていない広葉樹の樹種を見分けることができるのかと不思議でした。また、一般的な公務員のイメージとは全く違う世界で、戸惑いもありましたが、やがて自分でも山を歩けるようになり、山（森）や木の見方が体感としてなんとなく分かってきて、（今となっては本当に貴重だった）その経験が森林・林業マンとしての自分の基礎になっているように感じています。

当時も山の仕事のほかに、研修として木材加工工場を見学した記憶がありますが、木材利用の基礎的な知識も乏しく、いわゆる川上～川中～川下の繋がりが良く理解できていませんでした。その後、林業木材課での業務経験などを通じて、その繋がりが徐々に実感として理解できるようになり、川上での森林施業、川中業界の情勢や課題、川下での木造建築等について、それらの連関を意識しつつ施策の検討や議論ができるようになりました。

検討や議論はできますが、私が正しい解を知っているわけではありませし、明確なビジョンを持っているわけでもありません。そうした解やビジョンは、職員の皆さんや関係者との議論・検討・共同作業により少しずつ見えてくるものと思っています。試験場での研究自体は、一つ一つの課題に対する地道な作業が多いのかもしれませんが、ぼんやりとでもいいので、この北海道において、豊かで多様な森をベースとした産業・活動が発展している未来をイメージしながら、仕事を進めていければと思っています。

前段、「山（森）や木の見方が体感としてなんとなく分かってきて」と書きましたが、森林総研の正木隆さんは、「森づくりの原理・原則」という著書の中で、「森林について重要なことは、実はまだ何もわかっていないかもしれない」と言っています。私自身も30年以上森に関わる仕事に携わってきて、森に入る度に益々その言葉のとおりだなと感じますし、林産試験場が専門としている木材やキノコのこと、まだまだわからないことが多いのだらうと思います。私は研究職としての業務経験はありませんが、物事を解明したり、新たな知見を得ることはとても楽しいことと感じています。

はなはだ微力ではありますが、これから、職員や道民の皆様とともにその楽しみを共有し、北海道の木材産業・林業の発展と多様で豊かな森づくりに寄与できるよう尽力して参りますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。